島根県水産技術センター　漁況情報　平成 27 年 11 月 5 日発行

トビウオ通信　（H27 第９号）

（本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。）
http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/　（TEL 0855-22-1720）

《平成 27 年夏の漁況を振り返って》

今号は島根県の夏の漁業として代表されるばいかご漁業、あなごかご漁業、しいら漬け漁業、とびうお漁について、今漁期の漁況を振り返ってみます。なお、平年値は過去５年平均を用いています。

ばいかご漁業　１隻当たり漁獲量・水揚金額　平年を上回る

石見部のばいかご漁業は小型底びき網漁業の休漁期にあたる６月から８月にかけて操業を行ないます。漁場は日御碕沖から浜田沖の水深 200m前後の海域で、現在、大田市の漁船４隻が操業を行なっています。

今期のばいかご漁業における総漁獲量は 83 トン（平年比 103%）、総水揚金額は 4,712 万円（平年比 135%）で、水揚金額は平年を上回りました。また、漁獲対象であるエッチュウバイ（地方名：白バイ）の漁獲量は 70.1 トン、水揚金額は 3,930 万円でした。図１にエッチュウバイの１隻当たり漁獲量と水揚金額の推移を示しました。エッチュウバイの１隻当たり漁獲量は 17.5 トン（平年比 108%）、水揚金額は 983 万円（平年比 141%）で、平年を上回りました。また１航海当たりの漁獲量は 655kg であり、前年を下回りましたが、平成 26 年に次ぐ高い値となりました。

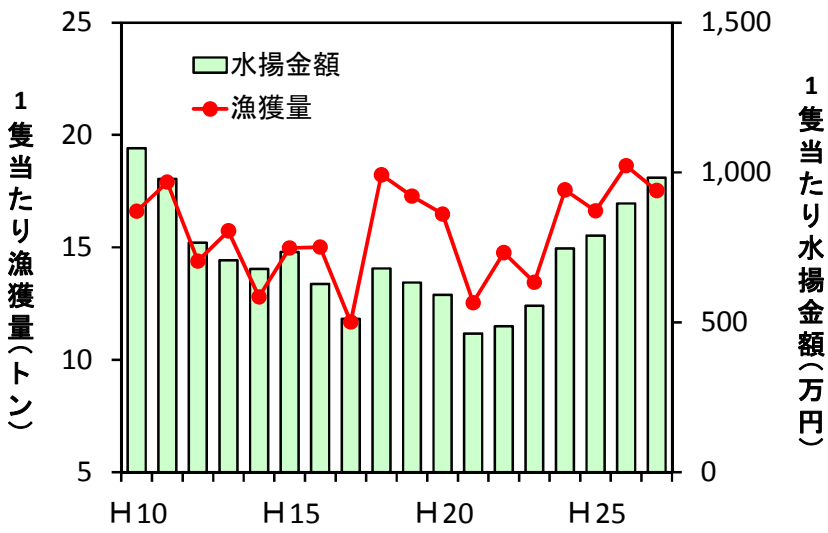

図１　石見部ばいかご漁業におけるエッチュウバイの１隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

あなごかご漁業　１隻当たり漁獲量・水揚げ金額　平年を大きく下回る

島根県はアナゴ類の漁獲量が全国第２位（平成 25 年）であり、その多くは底びき網漁業によって漁獲され、次いであなごかご漁業で漁獲されます。アナゴ類は夜間に活動が活発になるため、その習性を利用して、夜間に漁具を設置し、餌かごによりアナゴ類を誘引して漁獲します。

本漁業は、主に小底休漁期に石見地区で行なわれることから、ここでは 6～8 月を対象にまとめました。

今期の石見地区におけるアナゴ類の水揚げ状況は、漁獲量が 23.9 トン、水揚金額は 3,069 万円で、漁獲量は平年の５割、水揚金額は平年の８割の水揚げに留まりました。１隻当たりの漁獲量は 4.0 トン、水揚金額は 511 万円であり、量・金額とも平年を大きく下回り、漁獲量は平成 10 年以降、最低の水揚げとなりました。また、１航海当たりの漁獲量は 156kg で、前年並みであったものの、平年の５割の水揚げに留まり、昨年に続き低調に推移しました。

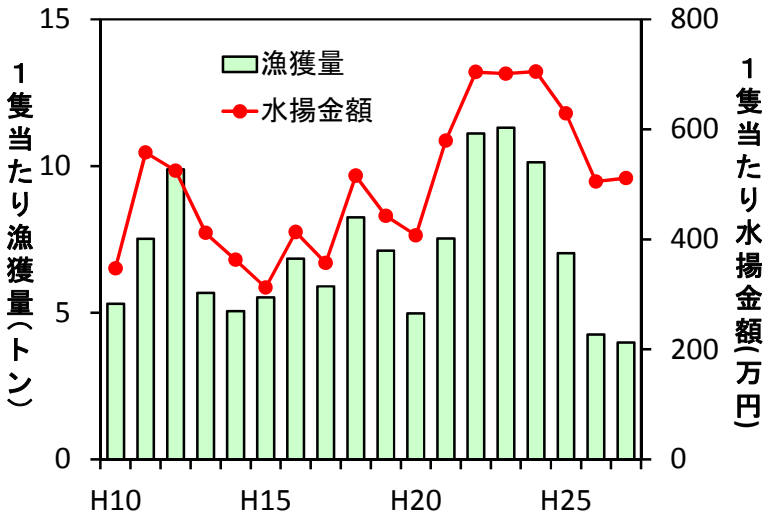

図２　あなごかご漁業の１隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

しいら漬け漁業　１隻当たり漁獲量・金額　平年を上回る

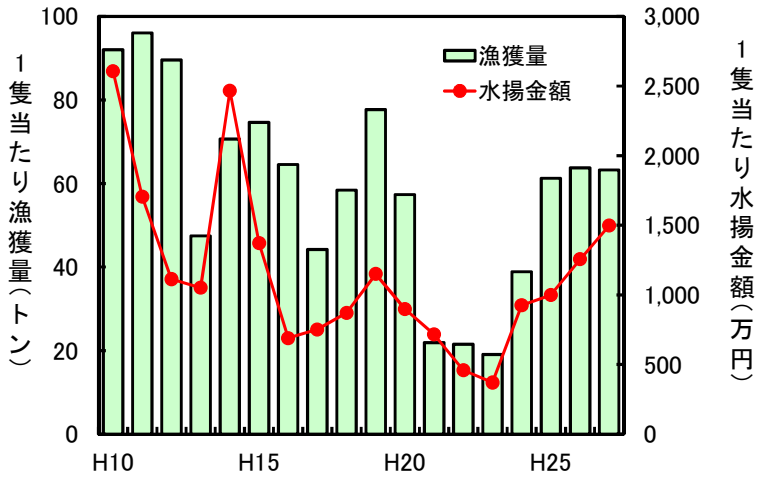

図３　しいら漬け漁業の１隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

シイラ等の回遊魚には物陰に寄り添ったり、集まったりする習性があります。この習性を利用した漁法がしいら漬け漁業です。この漁法は、漬木（つけぎ）と呼ぶ竹の筏を海面に浮かべ、そこに集まった魚を網で漁獲するまき網の一種です。現在は、隠岐、石見地区で夏季～秋季にかけて行なわれており、小底休漁期に操業を行なう石見地区がその中心となっています。今期（6～8 月）の石見地区における水揚げ状況は、総漁獲量が 253 トン、水揚金額は 5,991 万円でした。１隻当たりの漁獲量は 63.2 トン、水揚金額は 1,498 万円であり、漁獲量は平年の 1.5 倍、水揚金額量は平年の 1.9 倍の水揚げとなりました。

シイラとヒラマサの１隻当たりの漁獲量の推移（図 4）を見ると、シイラは年変動が大きいものの、平成 20 年までは 50 トンを超える水揚げが多くありました。その後、一時低調な時期もありましたが、最近年の漁獲量は以前の水準まで回復しています。今期の漁獲量は 213 トン、１隻当たりの漁獲量は 53.3 トンで平年の 1.4 倍となりました。一方、ヒラマサは平成 10 年以降、二度の豊漁年（平成 10 年、14 年）がありましたが、平成 16 年以降はまとまった漁獲がなく、低調に推移しています。今期の漁獲量は 36 トン、１隻当たりの漁獲量は8.93 トンで平年の 4.5 倍となりました。

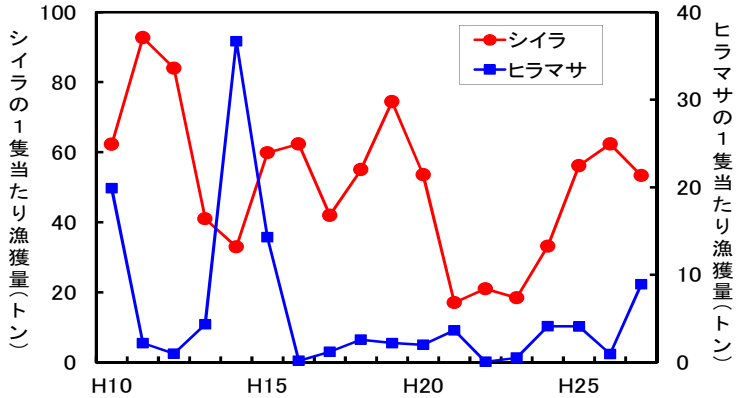

図４　シイラとヒラマサの１隻当たりの漁獲量の推移

とびうお漁　漁獲量・水揚金額　平年を下回る

トビウオ類は、冬の間は南方で生活し、暖かくなる初夏頃から産卵のため山陰沿岸に回遊してきます。島根県には 5 月から 7 月頃に来遊し、刺網、定置網、船びき網、まき網などの様々な漁法で漁獲されます。本県で漁獲されるトビウオ類は、主にツクシトビウオ（地方名：角アゴ、角トビ、大目）とホソトビウオ（地方名：丸アゴ、丸トビ、小目）の２種類です。トビウオ類は県下全域で漁獲されますが、ここでは漁獲統計が長期間にわたって揃っている地区を代表港（出雲部は美保関、島根町、御津、恵曇、大社、石見部は久手、和江、五十猛、仁摩、浜田、益田、隠岐は西郷、浦郷）として取り扱い、それぞれの値を集計しました。

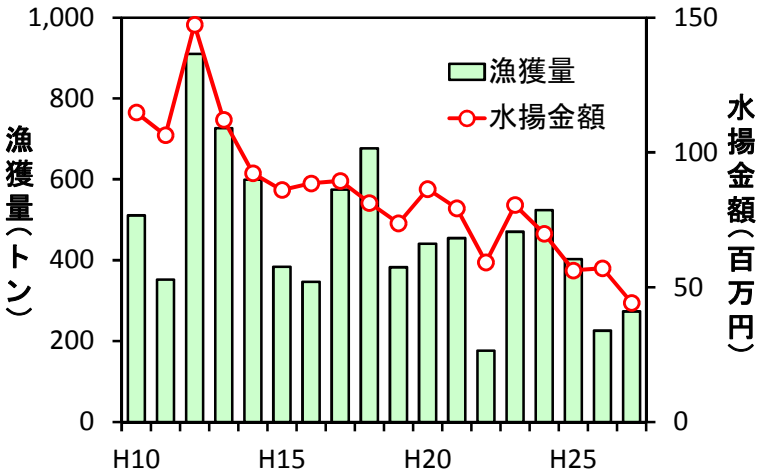

図５　島根県代表港におけるトビウオ類の漁獲量と水揚金額の推移

県下代表港におけるトビウオ類の水揚げ状況は、漁獲量が 273 トン、水揚金額が 4,429 万円で、漁獲量は平年の８割、水揚金額は平年の７割の水揚げに留まりました。漁獲量は平成 10 年以降に３番目に低い値となりました。また地区別では、出雲部が 132 トンで平年の９割、石見部が 89 トンで平年の８割、隠岐が 52 トンで平年の５割の水揚げとなり、隠岐での減少が顕著でした。

主な漁業種類別の漁獲量は、定置網が 169 トン、刺網が 43 トン、まき網が 37 トン、船びき網が 11 トンでした。また、種類別の漁獲は、ホソトビウオが 207 トン、ツクシトビウオが 66 トンで、ホソトビウオが多く漁獲されています。